

## 礼文島の鳥類相の特徴

藤巻裕蔵

〒072-0005 美瑛市東4条北2丁目6-1

### Characteristics of the Avifauna of Rebun Island, Northern Japan

YUZO FUJIMAKI

Higashi 4, Kita 2-6-1, Bibai, Hokkaido, 072-0005 Japan

**Abstract.** Based on a review of the ornithological literature, the characteristics of the avifauna of Rebun Island, northern Japan, are described by comparing avifauna between this island and the main island of Hokkaido. A total of 303 species (66.3% of species recorded on the main island) has been recorded from Rebun Island. Of these residents are 5.6%, summer visitors 25.7%, winter visitors 12.9%, transients 42.6% and accidentals 13.2%. The proportion of residents on Rebun Island to those on the main island is 34.0%. The corresponding values are 69.0% for summer visitors, 63.9% for winter visitors and 144.9% for transients. Between the main island and Rebun Island, Jaccard's coefficient is 0.66 for all species recorded and 0.78 for common species, but excludes accidentals. However, Jaccard's coefficients of residents, summer visitors, winter visitors and transients are lower than the above-mentioned values: 0.31, 0.53, 0.39 and 0.35, respectively, because of status differences between these islands.

#### はじめに

礼文島は面積 81.25km<sup>2</sup> で、北海道の離島（北方領土を除く）では利尻、奥尻両島に次いで大きな島で、北海道本島北部・稚内の西約 45km の日本海に位置する。礼文島の鳥類相についてはこれまでいくつか報告されているが（藤巻，1995；富川ほか，1995），島としての鳥類相の特徴については述べられていない。離島に生息する鳥類の種数は，島の面積やその島の大陸または大きな島からの距離と関係があることが知られており，その一例として日本列島では本土から離れるほど，また面積が小さくなるほど，生息するキツキ類の種数が少なくなるのことが知られている（樋口，1978）。このように，島の鳥類相には興味深いいろいろの特徴が見られる。礼文島の鳥類

については，すでに充実したリストがあるので（宮本，2016，2017），これに基づいて鳥類相のこの島としての特徴についての検討を試みた。

#### 記録の取り扱い

北海道鳥類目録（藤巻，2012）とその補遺\*によると，これまで北海道で記録されている鳥類は 483 種であるが，今回取り上げた鳥類は，北海道本島（以下，「本島」とする）についてはこれらから外来種 4 種（キジ，ヤマドリ，コブハクチョウ，カワラバト（ドバト），絶滅種 2 種（カンムリツクシガモ，トキ），礼文島以外の離島だけで記録された迷鳥 16 種（付記）を除いた 461 種である。礼文島では宮本（2016，2017）が挙げた種である。なお，本島では周辺海域

---

\* <http://bonasa4979.sakura.ne.jp/list.html>

で記録された海鳥類も含まれているので、礼文島についても同様にした。したがって、取り上げた鳥類は、島で記録された 286 種と周辺海域で記録された追加の 7 種の計 303 種である。

鳥類の渡り習性区分は、北海道本島については藤巻 (2012) に従い、一部は日本鳥類目録改訂第 7 版 (日本鳥学会, 2012) に基づいて修正し、北海道における留鳥、夏鳥、冬鳥、旅鳥、迷鳥とした。ただし、チシマウガラス、ウミガラス、ウミスズメ、ウトウ、エトピリカの 5 種は本島沿岸ではおもに冬に見られるので、今回は冬鳥とした。礼文島の鳥類の渡り習性については、宮本 (2016, 2017) に従ったが、「稀な旅鳥」、「稀な冬鳥」はそれぞれ「旅鳥」、「冬鳥」に含めた。また、周辺海域で記録された海鳥類とワタリガラスには渡り習性が書かれていないので、北海道における渡り習性区分に従った。なお、種によっては二つの区分にまたがるものがあるが、当該の種の多くの個体の渡り習性によった。例えば、本島でオオハクチョウは秋に渡来した個体の一部は越冬するが、多くはさらに北海道より南に渡るので旅鳥とし、ムクドリは冬も本島に留まる個体もいるが、多くは夏に渡来するので夏鳥とするなどである。また礼文島でムクドリは一部夏鳥であるが多くは旅鳥、コムクドリは稀な夏鳥であるが、多くは旅鳥なので (宮本, 2017)、いずれも旅鳥とするなどである。

## 結果と考察

全体の種数は本島で 457 種、礼文島で 303 種で、礼文島の種数は本島の種数の 66.3% である。このうち非スズメ目では 298 種と 179 種 (本島の 60.1%)、スズメ目では 159 種と 124 種 (本島の 78.0%) で、非スズメ目での差の方が大きい。本島だけで記録されている鳥類として、非スズメ目ではシギ・チドリ類 (30 種)、カモ目鳥類 (16 種)、カモメ・アジサシ類 (19 種)、タカ目 (9 種) などが多く、スズメ目ではヒタキ科 (9 種) やホオジロ科 (7 種) が多い。これらのうち、非スズメ目の 74 種、スズメ目の 31 種、計 105 種は観察される機会の少ない迷鳥で、本島だけで記録された鳥類の 68% 近くを占めている。類似を示す Jaccard 指数 (小林,

1995) は 0.66 で、あまり高い値ではない。

通常みられる種という意味で、これらの全種数から迷鳥を除くと、それぞれ 313 種と 263 種で、礼文島の種数は本島の種数の 84.6% である。同じく迷鳥を除くと、非スズメ目では 209 種と 161 種 (本島の 79.3%)、スズメ目では 104 種と 102 種 (本島の 99.0%) で、非スズメ目の方で大きな差がある。スズメ目の種数は本島と礼文島との間でほぼ同じなので、迷鳥を除く種数の違いは非スズメ目の種数の違いによるといえる。本島だけで記録されているのは、非スズメ目では 44 種、スズメ目では 7 種 (具体的な種名は次の渡り習性別の比較で述べる) である。このように、本島と礼文島で記録された種の数の違いは、非スズメ目に礼文島で記録されていない種が多いこと、さらにこれらの種に迷鳥が多いという違いによると言えるであろう。この場合の Jaccard 指数は 0.78 で、迷鳥も含めた全種の場合より高くなる。

次に、渡り習性別に比べてみる。本島における留鳥のうち、非スズメ目 10 種 (エゾライチョウ、タンチョウ、クマタカ、ワシミミズク、シマフクロウ、キンメフクロウ、ヤマセシ、オオアカゲラ、ミュビゲラ、ヤマゲラ)、スズメ目 2 種 (コガラ: 記録はあるが要検討とされている、カワガラス) が礼文島に生息しないか、または迷鳥である。このほか、礼文島ではトビ、コゲラ、ホシガラス、キバシリ、ミソサザイなど 10 種が夏鳥、コアアカゲラ、ヒヨドリ、エナガなど 7 種が冬鳥、キンクロハジロ、カワアイサ、マヒワなど 5 種が旅鳥で、これに迷鳥 2 種を加えた計 24 種、48.0% が留鳥ではない。このことが、礼文島の留鳥が 17 種 (表 2) と、本島の留鳥 50 種 (表 1) 比べて少ない大きな理由であろう。Jaccard 指数も 0.31 と非常に低い。

夏鳥では本島に生息する種のうち、非スズメ目ではウズラ、アマサギ、ジュウイチ、ハリオアマツバメ、ハチクマ、トラフズク、チゴハヤブサなど 18 種、スズメ目ではイワツバメ、センダイムシクイ、メジロ、ムクドリ、クロツグミ、オオルリ、イカル、ホオジロなど 15 種が礼文島では旅鳥である。このほか、礼文島ではシメが冬鳥、コウノトリ、ゴイサギ、

表1. 北海道本島における鳥類の渡り習性ごとの種数.  
Table 1. Number of species by status of birds on mainland of Hokkaido.

	留鳥 Resident	夏鳥 Summer visitor	冬鳥 Winter visitor	旅鳥 Transient	迷鳥 Accidental
非スズメ目 Non-passeriformes	28(9.4)	62(20.8)	49(16.4)	70(23.5)	89(29.9)
スズメ目 Passeriformes	22(13.8)	51(32.1)	12(7.5)	19(11.9)	55(34.6)
計 Total	50(10.9)	113(24.7)	61(13.3)	89(19.5)	144(31.5)

括弧内の数値は%。Figures in parenthesis indicate percent.

表2. 礼文島における鳥類の渡り習性ごとの種数.  
Table 2. Number of species by status of birds on Rebun Island.

	留鳥 Resident	夏鳥 Summer visitor	冬鳥 Winter visitor	旅鳥 Transient	迷鳥 Accidental
非スズメ目 Non-passeriformes	7(3.9)	40(22.3)	27(15.1)	87(48.6)	18(10.1)
スズメ目 Passeriformes	10(8.1)	38(30.6)	12(9.7)	42(33.9)	22(17.7)
計 Total	17(5.6)	78(25.7)	39(12.9)	129(42.6)	40(13.2)

括弧内の数値は%。Figures in parenthesis indicate percent.

クイナ、アカショウビンが迷鳥である。また、ヒクイナ、ホトトギス、アオバズク、セグロセキレイなど10種が礼文島で記録されていない。礼文島の夏鳥の種数は本島の夏鳥の種数の69.0%で、Jaccard指数は0.53と留鳥におけるより高い。

冬鳥では本島に生息する種のうち、非スズメ目ではコガモ、アオシギ、セグロカモメ、コミズクなど18種、スズメ目ではジョウビタキ、ミヤマホオジロなど5種が礼文島では旅鳥である。このほか、礼文島ではウミアイサが留鳥、ウトウが夏鳥、ズグロカモメが迷鳥で、チシマウガラスとアカマシコは礼文島での記録がない（過去にチシマウガラスの記録はあるが、宮本（2016）はこの種を未確認としている）。本島で夏鳥または冬鳥とされている鳥類のうち56種が礼文島では旅鳥である。これらは多くの場合繁殖期または越冬期における滞在期間が短いため、旅鳥に区分されたと思われる。ただし、エゾムシクイのように5～7月に観察されているのに、旅鳥とされ、区分が疑問とおもわれる鳥類が何種かいるので、今後観察記録が蓄積されると、旅鳥が夏鳥または冬鳥に区分されるようになるかもしれない。礼文島の冬鳥の種数は本島の冬鳥の種数の

63.9%で、Jaccard指数は0.39である。

本島の旅鳥のうち、礼文島ではエゾビタキが夏鳥、ミミカイツブリ、キレンジャク、ヒレンジャクが冬鳥、トウゾクカモメが迷鳥である。本島ではキレンジャクとヒレンジャクは公園や街路樹のナナカマドの実が食べ尽くされると姿を消し、春先にまた渡来するが、礼文島では越冬中に食物となる果実類が豊富なのであろうか。本島の旅鳥のうち21種は礼文島で記録されていないが、そのうち16種がダイゼン、アカシシギ、ヘラシギなどのシギ・チドリ類である。礼文島の旅鳥の種数は本島の旅鳥の種数の約1.5倍で、Jaccard指数は0.35である。

迷鳥は観察される機会が少ないが、本島で迷鳥とされている鳥類のうち礼文島ではケリ、ニシセグロカモメ、チョウセンメジロ、ホシムクドリ、シベリアジュリンの5種が旅鳥、アカガシラサギ、アカアシチョウゲンボウ、コクマルガラス、ハマヒバリの4種が稀な旅鳥とされているのは興味深い。これらのことから、礼文島におけるこれら9種の出現頻度が本島に比べかなり高いことがうかがえる。

留鳥、夏鳥、冬鳥、迷鳥の種数はいずれのグループでも本島より礼文島で少ないが、反対に旅鳥は礼

文島の方が多い。記録された全種に対する割合で比較すると、夏鳥と冬鳥の割合は本島で24.7%と13.3%、礼文島で25.7%と12.9%で両島間で大差なく、留鳥は10.9%と5.6%で本島の方でやや多い(表1, 2)。一方、旅鳥は本島19.5%、礼文島42.6%で、後者で2倍以上の割合であり、迷鳥では31.5%と13.2%と本島で2倍近い(表1, 2)。旅鳥と迷鳥でこの傾向は非スズメ目、スズメ目とも同じである。礼文島で旅鳥の種数が多いのは、本島の留鳥、夏鳥、冬鳥の一部が旅鳥となっているためであろう。試みに、この種数を礼文島の旅鳥の種数から差し引くと、旅鳥の割合は42.6%から28.4%にまで低くなるが、それでも本島19.5%よりは高い値である。また迷鳥の種数、割合とも本島より少ないのは、礼文島の面積が本島に比べてはるかに小さく、稀な種が渡来する機会が少ないためと考えられる。

全種のJaccard指数はそれほど高くなかったが、迷鳥を除くとだいぶ高くなった。これは普通に見られる種については本島と礼文島で共通種が比較的多いことを示している。しかし、渡り習性にみると、夏鳥で0.53であるほかは、留鳥、冬鳥、旅鳥では0.4以下である。これは同じ種でも渡り習性が本島と礼文島とでは異なる例が多いためである。

## まとめ

以上述べたことをまとめると次のようになる：

1. 記録された鳥類の全種数、迷鳥を除いた種数とも、礼文島では本島より少なく、Jaccard指数は0.66、迷鳥を除くと0.78である。
2. 本島の留鳥の一部が礼文島に生息せず、他の一部は夏鳥、冬鳥、旅鳥、迷鳥である。礼文島の留鳥の種数は本島の留鳥の種数の34.0%で、Jaccard指数は0.31である。
3. 本島の夏鳥の一部が礼文島では冬鳥、旅鳥、迷鳥である。礼文島の夏鳥の種数は本島の夏鳥の種数の69.0%で、Jaccard指数は0.53である。
4. 本島の冬鳥の一部が礼文島では留鳥、旅鳥、迷鳥である。礼文島の冬鳥の種数は本島の冬鳥の種数の63.9%で、Jaccard指数は0.39である。
5. 本島の旅鳥の一部が礼文島では夏鳥、冬鳥である。礼文島の旅鳥の種数は本島の旅鳥の種数の1.5倍で、Jaccard指数は0.35である。
6. 本島の迷鳥の一部が礼文島では旅鳥である。
7. 本島と礼文島との間で夏鳥と冬鳥の種数の割合は大差ないが、留鳥の種数の割合は本島でやや高く、旅鳥の種数の割合は礼文島で、迷鳥の種数の割合は本島で高い。

## 引用文献

- 藤巻裕蔵, 1995. 利尻礼文両島における鳥類観察記録. 利尻研究, (15): 25-30.
- 藤巻裕蔵, 2012. 北海道鳥類目録改訂4版. 極東鳥類研究会. 美唄. 78pp.
- 樋口広芳, 1978. 鳥の生態と進化. 思索社. 東京. 199pp.
- 小林四郎, 1995. 生物群集の多変量解析. 蒼樹書房. 東京. 194pp.
- 宮本誠一郎, 2016. 礼文島の鳥類(1). 利尻研究, (35): 67-82.
- 宮本誠一郎, 2017. 礼文島の鳥類(2). 利尻研究, (36): 1-12.
- 日本鳥学会, 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会. 三田. 438pp.
- 富川徹・小畑淳毅・福岡将之, 1995. 礼文島における春季(1994)の鳥類相. 利尻研究, (14): 11-16.
- 付記.** 北海道で記録された鳥類のうち礼文島以外の離島だけで記録された種(藤巻, 2012): ベニバト(天売島, 利尻島), ズグロミゾゴイ(利尻島), コウライクイナ(渡島大島), セグロカッコウ(天売島), ヒマラヤアナツバメ(天売島), チャバラアカゲラ(渡島大島), ルリガラ(利尻島), コウテンシ(天売島), ヤナギムシクイ(天売島), セアカジョウビタキ(利尻島), イナバヒタキ(利尻島), ミヤマヒタキ(天売島, 利尻島), イワミセキレイ(焼尻島, 利尻島), ヨーロッパビンズイ(利尻島), ズアオアトリ(利尻島), ズアオホオジロ(天売島).